

学位論文要旨

研究題目

The eCura system as a novel indicator for the necessity of salvage surgery after non-curative ESD for gastric cancer: A case-control study

(胃癌に対する非根治 ESD 症例における eCura システムの有用性)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻器官・代謝制御系

上部消化管外科学 (指導教授 篠原 尚)

氏名

小澤 りえ

【背景】

早期胃癌の診断で、内視鏡的粘膜下層剥離術 (Endoscopic submucosal dissection : ESD) を施行した際、非根治と診断されることも少なくない。この研究の目的は、非治癒 ESD の症例において、癌遺残状態の予測における、eCura システムの有効性を検討することである。

【方法】

非根治 ESD 症例で当科にて追加手術を行った 47 例を対象とし、外科切除検体での癌の局所遺残とリンパ節転移について調査した。また、癌遺残状態の予測因子を明らかにするため、ESD 検体での腫瘍径、深達度、リンパ・血管侵襲、組織学的マージン、および組織学的診断、eCura スコアも調査し、癌遺残陽性群と陰性群との 2 群間に分けて、両群を比較した。

【結果】

癌遺残の陽性例は 9 例 (19%) で、局所遺残は 6 例、リンパ節転移は 4 例に認め、うち 1 例が、両方を認めた。また、eCura スコアが高いと癌遺残率も高い傾向があり ($p = 0.0128$)、スコアは癌遺残の予測因子になりうると考えられた。特に、低リスク群 (スコア = 0~1 点) の患者では癌遺残は認められなかった。長期予後に関しては、4 年間の追跡期間中に癌再発は両群ともに認められなかったが、2 人の患者が肺炎で死亡した。

【結論】

非治癒性 ESD 症例で外科的追加手術を受けた患者の 80%以上が癌遺残は陰性であった。eCura システムは、追加手術の妥当性を決定する際に有用である可能性がある。